季刊 vol. 210

NAGOYA CITY MUSEUM NEWSLETTER

名古屋市博物館だより

編集・発行／名古屋市博物館　〒467-0806　名古屋市瑞穂区瑞穂通1-27-1
TEL(052)853-2655　FAX(052)853-3636　http://www.museum.city.nagoya.jp

平成26(2014)年7月1日発行　(年4回1・4・7・10月)
3,800部発行　無料　古紙パルプ配合再生紙使用

鳥になって空高く飛び立てば、目の前には見晴らす限りの爽快な景色が広がることでしょう。空を飛んでいる鳥が、地上を斜め下に見下ろしているように描かれたパノラマを「鳥瞰図」といいます。英語で表現するならば、“*bird's-eye view*”、まさに＜鳥の眼の景色＞です。日本では大正から昭和にかけて、こうした鳥瞰図が鉄道旅行の広まりとともに、携帯に便利なガイドとなりました。

鳥瞰図を観光案内に用いたアイデアマンは吉田初三郎（1884～1955）という京都出身の画家で、最盛期には愛知県・犬山の蘇江画室を拠点にして、全国各地の鳥瞰図を描きました。そして彼の作品に魅せられ、「初名会」というファンクラブを作って、その収集と研究に打ち込んだ人物が愛知県出身の小川文太郎（1898～1985）氏です。

戦災をこえて今に伝わる同氏のコレクションにより、大正・昭和の日本を空からじっくり眺めてみませんか。今年はちょうど吉田初三郎の生誕130年にもあたります。さあ、この夏はレトロな日本の空旅へ出かけましょう。

Let's take a bird's-eye view of retrospective Japan !

展覧会のご案内

会　期　7月26日（土）～9月15日（月・祝）
休館日　毎週月曜日（最終日を除く）・8月26日（第4火曜日）
観覧料　一般 600（400）円、高大生 400（200）円、
　　小中生無料　かっこ内は 20名以上の団体
主　催　名古屋市博物館・日本経済新聞社・テレビ愛知

東アジアの歴史遺産と旅

歴史遺産と旅

つい先頃の6月15日に、「富岡製糸場と絹産業遺産群」（群馬県）が世界遺産に登録されました。日本で14番目の世界文化遺産（自然遺産も含めた世界遺産としては18番目）です。

4月26日に、UNESCO（国際連合教育科学文化機関）のICOMOS（国際記念物遺跡会議）が登録を勧告したと報道されると、さっそくたくさんの人が富岡製糸場を観光に訪れました。近年の世界遺産ブームは、たんなる文化財愛護の精神ではなく、観光・旅行で楽しむことと結びついています。

さて、歴史的な遺跡や名所を訪ねる旅行は、世の中が平和で豊かな現代だからこそと思えます。しかしながら、かつて日本が近代化を目指した明治から昭和初期の時代にも、意外に多くの日本人が中国や朝鮮半島などアジアを旅していました。

当時の旅の目的は、観光、学術的な調査・研究、教育、ビジネス、政治・外交、兵役など、さまざまでした。また、多くの知識人や政治家なども、しばしば日本へやってきました。この時代の旅行や海外渡航は、残念ながら必ずしも平和的な目的でない場合がありましたが、ともあれ人の往来はたいへん盛んでした。また観光旅行が、日本人の各個人の好奇心や知識欲を掻き立て、自分の外にある世界の視野を広げ、大きな感動をえたことはまちがいありません。

博物館資料のなかの歴史遺産

当時、中国や朝鮮半島に旅したり滞在した日本人のなかには、自身の好奇心や趣味、関心が高じて、現地のいろいろな品物を収集してくる人もいました。そうした経緯で収集されたであろう品々は、今でも個人でご所蔵のものもあり、また各地の博物館・美術館などに保管されているものもあります。

名古屋市博物館でも、あまり多くはありませんが、そういった品物を資料として所蔵しています。そのなかには見栄えのしない破片資料もあります。しかしその経緯や来歴を知ることで、一見つまらないと思える地味な破片にも、それが物語る歴史背景がしっかりとあることがわかります。それらは今の名古屋に残された、近代日本人の知的好奇心の「記憶」とも言うべきものです。

博物館資料が語る「記憶」

さて、名古屋市博物館が所蔵する考古資料に、中国・南京市にある明孝陵の陵墓建築に使われた「琉璃瓦」の破片があります。

明孝陵は明王朝（14～17世紀）の創始者である、洪武帝朱元璋（明の太祖）とその后妃の陵墓です。清朝末期以来、今に至るまで、壮大な中国の皇帝陵を見られる名所として多くのひとびとが観光に訪れています。現在、明孝陵は［世界遺産　明・清朝の皇帝陵墓群］に登録されています。

琉璃瓦は鮮やかな色彩の釉薬をかけた高級品の瓦で、その技術は明代に頂点に到達しました。なかでも黄色の琉璃瓦は、皇帝の宮殿・陵墓や、皇帝の勅許を特に得た建築でしか使うことのできない禁色の瓦でした。

南京・明孝陵の琉璃瓦片（館蔵）

この瓦片は、詳しい経緯は不明ですが、昭和5年（1930）8月29日に明孝陵で採集したと注記があります。また同じ採集者による資料には、蘇州の寒山寺・虎丘の瓦、杭州の六和塔の磚（レンガ）もあります。注記された日付から、この採集者は8月29日～31日に連日移動して、南京・蘇州・杭州を訪れたことがわかります。300km以上を移動する、じつに過密なスケジュールの旅行です。

ちょうど昭和初期（1926～1940頃）の日本では、中国への民間旅行がとくに盛んで、南京・蘇州・杭州などは代表的な旅行先のひとつでした。ですから、旅行ブームにだれか中国を旅行した人が、名所を訪れた思い出の記念、あるいは遺跡や文化財への興味で、個人的に採集して持ち帰ったのでしょう。

現在は文化財を無断で持ち帰ることは法律で厳しく禁じられています。しかし、まだ社会全体が大らかだった時代のこととして見れば、当時のひとびとが旅行で抱いた興奮が伝わるような気がします。

明孝陵の琉璃瓦なども登場する、常設展“話題のコーナー”「東アジア交流の考古学」を、6/25（水）～8/24（日）、開催します。ぜひお越しください。

（藤井康隆）

常設展フリールーム『機織(はたお)りの手間ひま』

平成26年6月25日(水)～8月24日(日)

機織り体験記

「着物は、一枚の長い布をまっすぐに裁って作られているので、たとえ一部やぶれてしまっても、糸を解いてしまえば使い勝手の良い布きれになる。子ども用の着物に仕立て直してもよいし、袋などの小物を作ってもよい。そうして、いくつかに形を変えて、最後は雑巾となり、無駄なく使い尽くす。」

そのような着物を無駄なく最後まで使いきる使い方に、私はとても興味を覚えました。「これでもか」というくらいの資源の有効利用に、昔の人々の生きたエネルギーを感じるからです。ここまで使い尽くすのは、布を織るのがとても大変で、貴重だからだと考えられます。

でも、本当のところ、布を織るってどれほど大変なのでしょうか？それが知りたくて、木綿で有名な知多市にある「手織工房やまもも」にご協力いただき、機織(はたお)り体験をすることにしました。

布を織るということ

みなさんは、機織りをしたこと、見たことがありますか？昔話の「鶴の恩返し」で、ツルが自分の羽根で機織りしている場面が出てきます。機に張ったたて糸に、舟のような形をした「杼(ひ)」という道具を使い、よこ糸を通していく。私は実際やったことがなくても、ぼんやりとそのイメージをもっていました。何十回、何百回と一本一本、糸を通して布を織りあげていくのは、考えただけで、なかなか大変ですよね。

でも実際やってみて知るのですが、その前に、いくつかの、というより、いくつもの準備が必要となります。ざっというと下のような工程があります。

①整経(せいけい)…たて糸を必要な長さに用意する
②筬(おさ)通し…たて糸を筬に通す
③チキリ巻き…たて糸をチキリという棒に巻く
④かざりかけ…たて糸を上下に分けるため糸をかける
⑤機(はた)あげ…機にたて糸をのせる
⑥織る…たて糸によこ糸を通して布を織る

この工程で見ると、鶴の恩返しの場面は⑥にあたります。それぞれの工程を詳しく説明すると、とてもこの紙面では間に合いませんので、ぜひとも展示室でご覧いただきたいのですが、要するに、とっても手間ひまかかる作業です。

筬通しの様子

一つ例をあげれば、②の筬通しという作業。筬は、機織りのときによこ糸を打ち込むための道具です。この筬の細かい歯と歯の間（総数400個！）に、2本ずつ、たて糸を入れていきます。ちょうど、30㎝のつげ櫛の歯の間に、糸を入れていくようなものです。白い糸ははっきり見えるのでいいのですが、紺のような暗い色だと、どの間に入ったかがとてもわかりにくく目をこらしての作業となります。おまけに、ずっと下を向いているので、首が痛くなりますし、肩もこります。そうして苦労して最後まで入れ、糸が入っていないすきまが残ったりすると、もう、真っ青。どこかで一つの間に糸を2回入れている可能性があるからです。そうなると、せっかく入れた糸ですが、間違えたところから抜いて、入れ直しとなるのです。

――結局、初心者ということもあって、私は機織りを準備する（工程①～⑤）までにおおよそ4、5日かかってしまいました。そこから、やっとで機織り（工程⑥）が始まります。この時私が織ったのは2mの布でしたが、それで2、3日はかかりました。機織りにかかる時間は、布の長さや織り方、模様によって変わるため、一概にいえませんが、着物用に織りあげようとすれば、一反がおよそ12mなので、その6倍！？

機織りを通して

機織りを体験して、その手間ひまが身に染みてよくわかりました。「こんなに手間ひまかけて作るのだから、無駄にはできない」となるのは至極自然なことです。それだけでなく、作る過程を見た事で、出来上がった布にどれほどの糸が使われているかも目に見えて知ることができ、資源として、糸を意識することにつながると思います。

今回の展示では、この体験をもとにし、機織りの工程を道具とともに一つ一つ説明し、布を織りあげていく様子をご紹介します。その手間ひまを通して、昔の人が持っていたであろう布を“大切にする心”に触れていただければ、と思います。

（佐野尚子）

名古屋市博物館特別展

NIPPONパノラマ大紀行

2014.7.26 - 9.15

～吉田初三郎のえがいた大正・昭和～

ちょっとだけ紙上で空旅を～

◉特別展

鳥瞰図の第一人者として知られる吉田初三郎は、一説には約 1,600 点もの作品を制作したといわれます。そして彼の作品に魅せられた小川文太郎は、昭和３年 (1928) から昭和 60 年 (1985) まで、生涯をかけて鳥瞰図の収集と研究にあたりました。

小川文太郎コレクションでは、大正から昭和にかけての、在りし日の日本各地の姿をつぶさに見ることができます。展覧会に先立ち、ほんの少しコレクションをのぞいてみましょう。

展覧会の構成

＜プロローグ＞

鳥瞰図とはどのようなものなのか、名古屋市を例にとりあげます。昭和 10 年前後、戦前名古屋が最も繁栄した頃の様子が描かれているものです。

＜第１章＞

伸びる鉄路とバーズアイ－Bird's Eye－の旅行案内

１）日本の鉄道開業から５０年

２）観光鳥瞰図のはじまり

明治５年の鉄道開業から、50 年を迎える大正 10 年代初めまでの様子と、その頃までに発行された鳥瞰図の初期作品をご紹介します。

＜第２章＞

飛躍－犬山・日本ラインを新たなる拠点として

１）観光社蘇江画室での鳥瞰図制作

２）初名会と鳥瞰図研究

大正 12 年（1923）９月１日の関東大震災以降、吉田初三郎は縁あって愛知県犬山の日本ライン沿いに新たな画室を設け、再出発しました。地元愛知県に関連する鳥瞰図作品と、小川文太郎コレクションの成り立ちをご紹介します。ここでは県内に伝わる鳥瞰図原画もいくつかご覧いただきます。

＜第３章＞

列島縦断・日本パノラマ大紀行

１）行楽・探勝の足をのばして－東海

２）鉄路は歴史と伝統の社寺へ－近畿

３）日本の多島海を結ぶ－中国・四国

４）火山のけむりと湯のけむり－九州

５）行楽は郊外電車に乗って－関東

６）日本の屋根から水の恵み－甲信越・北陸

７）北の大地はフロンティア－北海道・東北

大正から昭和 10 年代にかけて、各地で刊行された鳥瞰図を７つの地域にわけて、ご覧いただきます。レトロでありながら、どこかちょっとモダンな面影もただよう日本の姿をお楽しみください。

＜終章　国際観光へのかけはし＞

最後に、吉田初三郎が戦前、国際観光にも尽力していた様子を紹介してしめくくりとします。

＜コラム　旅行の楽しみ＞

この他に、切符や汽車茶瓶など、鉄道や観光に関する館蔵資料をいくつかトピックで展示します。

展示件数　鳥瞰図 201 件、ポスター 41 件はじめ関連資料を含め 307 件を展観します。

関連事業

○連続講座

「**鳥瞰図を読み解く**」（当館学芸員　井上善博）　聴講無料

各回午後２時より１階展示説明室（１時半開場）　先着 100 名

第１回　７月 26 日（土）

鳥瞰図に魅せられて～小川文太郎コレクションの成り立ち～

第２回　８月９日（土）

初三郎式鳥瞰図のマジック～富士山へのこだわり～

第３回　８月 16 日（土）

「史鉄（してつ）」の楽しみ～生まれる鉄道・消えゆく鉄道～

第４回　８月 30 日（土）

鳥瞰図を旅する～千年の都・京都～

第５回　９月６日（土）

地震・火災の苦難を越えて～時を刻むふるさとの景観～

※各回の内容については当館ホームページをご覧ください。

○パノラマクイズラリー

会期中毎日開催、夏休みの自由研究にどうぞ。クイズ用紙を会場入口で配布します。

○ファミリーデー

７月 29～31 日・８月５～７日の６日間

学芸員の解説付きでクイズラリーを開催。

当日朝９時半より受付、10 時開始（約 30 分）

小学生とその保護者の方　各日先着順 20 組

保護者の方はチケットが必要となります。

○パノラマはめ絵パズル

展示品の鳥瞰図と同じ大きさで制作した 48 ～ 96 ピースの簡単なパズルです。会期中会場内通路で毎日開催。

⑨小田原急行鉄道沿線名所案内
表紙部分（昭和２年）

①小樽（昭和６年）

北海道の海の玄関、小樽港には日本初の外洋防波堤が建設され、近代日本のフロンティアとして栄えた。運河は一部今も残る。

②富士身延鉄道沿線名所図絵（昭和３年）

甲府までの全線開通に際して発行。昭和 16 年（1941）国有化されて身延線となった。

③木曽川と大同電力（昭和 12 年）

戦前、名古屋の電力王と呼ばれた福澤桃介は、木曽川水系に次々と水力発電所を建設した。

④養老電鉄沿線名所図絵（昭和３年）

デフォルメされた養老の滝がひときわ目立つ。養老山系に沿って一直線に伸びる鉄道が確実な交通手段として旅行者を導く。

⑧地獄めぐりポスター（昭和３年）

湯の町別府では、同年の博覧会開催をきっかけに、女性車掌が車中ガイドをおこなう遊覧バスが走り始めた。

⑩大正９年年賀状より写生中の初三郎自画像

掲載図版はいずれも吉田初三郎作
⑥を除き、小川文太郎コレクション

⑤Beautiful Japan ポスター（昭和５年）

桜の下で富士山を背景に花魁姿の女性が籠にのるデザイン。海外からの観光客を誘致する目的で作成・配布された。

⑥小牧山戦蹟図（昭和２年）

小牧町長の依頼により制作した原画。名古屋市秀吉清正記念館所蔵

⑦名古屋市鳥瞰図（昭和 12 年）

戦前最大の国際博・名古屋汎太平洋平和博覧会を開いた時の街並み。名古屋駅を改築し、東山公園も開園。

橘町と博物館活動…
由緒を守り、歴史を残す

「橘町（たちばなちょう）は博物館のようだ。」唐突ですが、常設展フリールーム「橘町350年」(8/27-10/19) のため、橘町の歴史を調べていて感じたことです。なぜ、江戸時代から続く町が、博物館のように思えるのでしょうか。

橘町の歴史

尾張藩二代藩主、徳川光友が「橘町」と命名したのが寛文四年 (1664)。そこを起点として、町の歴史は、今年でちょうど350年を迎えることとなります。

橘町が他町と異なるのは、町に与えられた二つの特権にあります。一つは、名古屋城下における古鉄・古道具の専売権。光友は城下の古鉄・古道具屋を橘町へ集住させ、橘町以外での販売を禁止しました。もう一つは、年２回の芝居興行権です。若宮八幡、大須観音、清寿院などと並び、町に興行権が与えられたのです。

収益増加につながる特権は、町の利益の正当性を語る上で不可欠なものとなり、町の歴史に組み込まれて由緒となりました。由緒に関する資料は瑞龍（ずいりゅう）工芸技術保存振興会 (以下、瑞龍工芸と表記) の所蔵となり、今も大切に保管されています。瑞龍工芸は、古鉄・古道具屋の系譜をひく、仏具商や仏具職人で構成される組織です。**町の権利を守る＝町の歴史を守る**といったところでしょうか。橘町や瑞龍工芸の活動は、歴史を守り、伝えていく博物館の活動に似ています。

守る・伝える

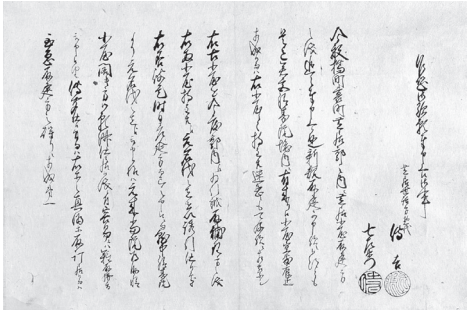
古鉄・古道具や芝居の特権は、いうまでもなく町の貴重な収入源です。利益を守るためには権利を守らなければなりません。そこで、町では特権の由緒や権利をめぐった争いを記録するようになります。ここでは芝居興行に関する争いと橘町の主張を紹介しましょう。

（その１）

享和元年 (1801) 以降の芝居は大須と橘町が隔年で行なうこととなりましたが、江戸時代後期には忘れられてしまいます。結果、橘町は芝居ができず、若宮や清寿院ばかりとなりました。しかも、若宮と清寿院は芝居の他、見世物も認められています。橘町は藩に対して、今後の芝居興行は橘町に限るよう訴えました。

（その２）

明治三年 (1870) は、橘町芝居があるので、若宮、清寿院、大須の興行が中止となるはずでしたが、清寿院側が興行継続を主張しました。これに対し、橘町は当初の取り決め通り、清寿院の中止を訴えています。



芝居興行嘆願の文書
明治３年（1870）　瑞龍工芸技術保存振興会蔵
芝居興行をめぐる古文書

『名古屋市史』第四巻 (1999) によれば、18世紀の名古屋の人口は12万人ほどで、現在のおよそ20分の１です。各所で同時に芝居や見世物があると、観客の奪い合いで利益が出ません。だから権利を主張し、相手の興行を規制します。そのためには権利の正当性を記した由緒などの古文書を根拠としなければならなかったのです。

橘町同様、名古屋市博物館の周りにも強力な美術館、科学館などのライバルがたくさんいます。公共の施設とはいえ、博物館にも収益増加が求められる昨今、他の興行を規制する橘町の苦悩は実によくわかるのです。

地域に根ざした活動

現在、橘町資料は、毎年11月16日に日置神社（中区）で町内向けに公開されています。瑞龍工芸は、資料を通して地域の人々が町の歴史や伝統を知ることで、橘町を好きになってもらおうと努めています。

また、橘町を活動の中心とする名古屋仏具研究会（若手の仏具商や職人で構成）や町の女性会も地域に根ざした活動をしています。仏具製作の技術である蒔絵体験のワークショップなどを行い、歴史だけでなく、地域の伝統産業を理解してもらおうというのです。

江戸時代の橘町は、町の由緒や歴史、権利を守るために記録を残しました。現在は、そこで守られた伝統産業をワークショップなどで伝えています。資料と体験で町の歴史を学ぶ活動が橘町にはあるのです。

橘町は町の利益を守るために、歴史を担い伝統産業を守ってきました。これからも瑞龍工芸などの町の組織が歴史を守っていくのでしょう。博物館も地域の文化を守り、発展させるために歴史を担っています。立場こそ違いますが、それぞれが根ざす地域のために働く姿勢は共通しています。

また橘町のようにワークショップを活用した事業が、博物館にも求められています。今年で37歳の博物館ですが、350年の歴史を持つ橘町を見習って、まだまだがんばっていかなければならないのです。

（武藤　真）

よみがえれ文化財！
優れた文化を、名古屋の歴史を、後世に伝えるために。

名古屋市博物館では、「よみがえれ文化財」として、平成25年4月から博物館資料を修復・活用するための寄附を募っています。平成26年3月31日までの約1年間で、50の個人・団体から計11,740,500円という多くのご寄附をいただきました。感謝申し上げます。

この事業は、当初は以下の主に3つの事業の実施を目指し開始しました。

1 伊勢参宮図屏風の修復
2 古墳時代の刀剣の保存処理
3 名古屋を記録した写真資料のデジタル化

皆さまからのご寄附により、以上の3つの事業ともに開始の目処がたちました。

1と2については、修復をおこなう専門業者も決まり、作業をすすめています。文化財の修復は、非常に専門的な技術が必要で、慎重におこなわなければならないため、1年以上かかる予定です。

3についても、寺西二郎氏らが名古屋の戦後の街を撮影した写真資料のデジタル化をするため、現在準備をすすめています。

いずれも、少し時間がかかりますが、皆さまにお披露目できる時期が決まりましたら、あらためてお知らせします。

このような、博物館資料の保存・修復等に限定して寄附を募るということは珍しい取組です。こうした新しい取組ではありますが、趣旨にご賛同いただけた方々のご寄附により、博物館資料がよみがえり、新たな活用が可能となることは、大変意義あることです。また、博物館職員としても、皆さまからの熱い思いが励みになるとともに、博物館資料を後世に伝えるという責任の重さを、改めて強く感じる機会ともなりました。

先に挙げた事業は進み始めましたが、博物館が修復・活用していかなければならない資料は多数あります。今後も博物館資料のすばらしさ・大切さを伝えることで、この事業へのご理解を深めていただけるようにし、さらに以下の事業の実施を目指して行きます。

円空仏の補助具製作

大胆な造形で人気が高い円空仏のなかでも、当館が所蔵する「十一面観音菩薩立像」は大型で見栄えするものです。しかし、その重量のため足元に負担がかかり、長期に展示することが難しいため、補助器具を作成し、より安定して展示できるようにします。

芭蕉を描いた掛軸などの修復

わが日本を代表する俳人で、名古屋とも縁が深い松尾芭蕉の画像「芭蕉翁図画讃（ばしょうおうずがさん）」をはじめ、当館には日本や尾張の文化には欠かせない掛軸が多数あります。これらの中には、博物館が受贈した時には破損していたものがあるため、修復することで活用できるようにします。

貴重な資料記録写真のデジタルアーカイブ

博物館には、市内・尾張をはじめ全国の貴重な文化財の記録写真があります。このなかには、今は災害などのため実物がなくなってしまったものもあります。こうした記録写真をデジタル化することで、利用しやすくするとともに、万が一の災害に備えます。

「よみがえれ文化財」は優れた文化財を後世に伝えるために、寄附を募る事業です。広く皆様の理解・応援をお願いいたします。寄附は、教育基金あてに専用の納付用紙で行なっていただきます。博物館で配布していますので、詳細はお問い合わせください（電話052-853-2655）。

平成25年度寄付者名（公開に同意された方のみ、受付日順、敬称略）

三嶋屋 細野豊晴
林幸司
木越律子
富士シリシア化学株式会社 名古屋営業所
山田清子
山田克哉
株式会社三勇商店
飯田和子
大野勝藏
瑞穂通商店街振興組合
伊藤正裕
磯貝紀枝
近藤道子
加藤博司
日本美術刀剣保存協会名古屋支部
カニエプロパン株式会社
　代表取締役会長 黒川公明
榊原康司
佐久間洋一
加藤玲子
ITC 名古屋クラブ
加藤景之
株式会社カトウスタヂオ
株式会社中央工芸
株式会社ニホンディスプレイ
ほか匿名26名

十一面観音菩薩立像
江戸時代 円空作

資料紹介
味噌溜店「井桁芳」関係資料

明治から昭和まで続いた味噌溜店で、販売に使われた道具や建具などを受贈した。新収資料を通じて、かつての店の様子や仕組みをみてみよう。

○生活と店

日本各地には昭和に入っても自家製の味噌を作っていた地域が数多くあった。一方名古屋では、東海地方独特の豆味噌、そして豆味噌から抽出される溜について、大正初期ころから購入することが一般的になったという（『新修名古屋市史　第９巻民俗編（第６章食生活）』）。食事の基本ともいえる調味料を得るために、名古屋では比較的早い時期から店の存在が欠かせなかった。

今回紹介するのは、西区浅間で明治 31 年から昭和 17 年まで、味噌や溜の製造販売をしていた井桁屋という店の資料である。本家も井桁屋であったので、本家と区別するために初代芳次郎氏の名前をもって井桁芳と呼ぶこともあった。

写真１　ラベル

買いものをする時に訪れるのは、商家の表の部分である。伝統的商家の間取りは細長く、公的な表側の「店」と私的な生活空間の「奥」とで構成される。（『新修名古屋市史 ９巻民俗編（第４章２節商家の民俗）』）。井桁芳の間取りも細長く、店と居室の間は写真２のつい立てで仕切られていた。

写真３はつい立てが置かれていたあたりから、店の入り口に向かって撮影した写真である。店の２階では、住み込みで働いていた人が寝起きをした。

写真２　つい立て

写真３　井桁芳の内観
平成25年撮影

○年季と別家

住み込みをして店で働く期間を年季（期）といい、年季が明けた人が、本家から金銭や家財などを贈られて店を開くことを別家といった。井桁芳自体がそのように開店し、また井桁芳からさらに別家して店を開く人もいた。

その際には井桁芳から、家名、資金、のれん、半纏など店に必要なもの、衣服や布団などの生活用品が別家祝として贈られた。

別家した家とは、その後も年始や冠婚葬祭でのつきあいが続いた。それまで店の中でつちかわれた関係が、別家後は店と店の関係となったといえる。写真４は井桁芳で使われたのれんである。このような本家から贈られた名前が入ったのれんは特別な存在であったと考えられる。　（長谷川洋一）

写真４　のれん（夏用）